

運営協議会と教育実践プロジェクト連絡協議会開催！

平成29年7月6日(木)に平成29年度第1回「宇都宮大学教職大学院運営協議会」および「教育実践プロジェクト連絡協議会」が開催されました。教職大学院は、地元の教育委員会と密接な連携を取ることが開設の必須条件になっており、その後も継続的な連携の上に教育内容・方法や指導体制等を常に見直し改善していくことが求められています。宇大教職大学院ではこの時期と2月に2回開催して、この責務を果たしています。

◆教職大学院運営協議会

伊東研究科長が別の会議のため欠席したため、松本専攻長が代理で司会進行して行われました。平成28年度の運営報告と29年度の運営計画について審議・承認があり、29年度の連携協力校及び連携協力実習校(右下参照)の案について承認されました。この件に関して県教委の委員から所属校が実習校となる場合について確認の質問があり、勤務ではなく実習としての内実を細かい指導を通して保障していることを説明しました。

また、今年度教員養成評価機構による認証評価を受けるので、その準備作業や今後の大まかな流れについて報告しました。



◆教育実践プロジェクト連絡協議会

専攻長の進行で行われました。平成28年度運営報告が承認され、その後、運営協議会での29年度連携協力実習校決定を受けて院生の研究テーマ及び指導チームの組織について承認されました。後半は出席いただいた学校からご意見等を順に伺いました。28年度に引き続きお引き受けいただく学校からは28年度の取組みについて説明や感想があり、29年度新規の学校にとって意義ある情報をいただきました。



◆連携協力校と連携協力実習校

平成29年度は、昨年を大きく上回る52校(小26、中24、

特支2、宇大附属小中を含む)が連携協力校になってください、その中から25校が連携協力実習校として院生を受け入れてくださることになりました。4月から長い時間をかけて院生の実践研究テーマと連携協力校の実践課題とを勘案して決定したものです。今年度は初めて県内7つの教育事務所管内に連携協力実習校が1つ以上あるという形になりました。

1、2年生合わせて34人の院生が6人程度のチームを6つ作り、それぞれ2人の専任教員が指導します。さらに2つずつのチームが合体して3つのグループを作っています。こうして、《全体→グループ→チーム》という3重の指導体制で、3つの規模のリフレクションで実習の経過報告や課題への対応の協議が行われます。この体制とデジタルポートフォリオにより、すべての教員とすべての院生がそれぞれの実習校における活動の状況を把握し、アドバイスしあうことが可能になっています。

なお、院生配置のなかった連携協力校でご希望の学校には、校内研修等での支援を行います。

《平成29年度連携協力実習校と実習生数一覧》

- 宇都宮市立西小学校(現職1名)
- 宇都宮市立峰小学校(現職1名・学卒1名)
- 宇都宮市立石井小学校(現職1名)
- 宇都宮市立城東小学校(現職1名)
- 宇都宮市立陽東小学校(学卒1名)
- 上三川町立明治南小学校(現職1名)
- 鹿沼市立北小学校(現職1名・学卒1名)
- 鹿沼市立榎木小学校(現職1名)
- 鹿沼市立みなみ小学校(現職1名)
- 壬生町立稲葉小学校(現職1名)
- 栃木市立皆川城東小学校(現職1名)
- 下野市立薬師寺小学校(現職1名・学卒1名)
- 宇都宮市立泉が丘中学校(学卒1名)
- 宇都宮市立上河内中学校(現職1名)
- 鹿沼市立北犬飼中学校(現職1名)
- 真岡市立久下田中学校(現職1名)
- 下野市立国分寺中学校(学卒1名)
- 那須烏山市立南那須中学校(現職1名)
- 高根沢町立阿久津中学校(現職1名)
- 那須塩原市立西那須野中学校(現職1名)
- 佐野市立葛生中学校(現職1名・学卒1名)
- 栃木県立足利特別支援学校(現職1名)
- 栃木県立足利中央特別支援学校(現職1名)
- 宇大 附属小学校(学卒3名)
- 宇大 附属中学校(現職1名・学卒3名)

(文責:松本 敏)

授業は、学校で日々なされる営みであり、暗黙のルールや型、前提に依存しながら行われる「文化的活動」と言われます。こうした文化的側面は、教師も子供も日々慣れ親しんでいるため、あまり表面化しませんが、他国の様子と比べることで改めて気付くことも少なくありません。

数学科授業の国際比較研究によって、数学の授業の組み立て方において、日本の特徴的な側面が浮き彫りになりました。それは「仕組まれた問題解決」と呼ばれています (Stigler, J. W. & Hiebert, J. 著, *Teaching Gap*, The Free Press, 1999)。数少ない問題をじっくりと時間をかけて解く。個別解決から始まり、様々な解法について話し合う集団解決が続く。教師は最後に本時のまとめをし、新しい数学的内容を導入する、という授業の展開の仕方です。他教科でも類似のものがあるのでしょうか。まず教師が内容を解説し、その後、練習問題で子供が知識・技能を獲得していく流れをとる国も多いことを考えると、その特徴が分かります。なぜ、このような展開をするのか、その背景には、

数学の学習指導に対する教師の価値観があります。Stigler氏らは、日本の教師の「数学の特性」、「学習の特質」、「教師の役割」、「個人差」、「授業の尊厳」についての考えが、米国の教師と違うことを指摘しています。

日本の教師は、授業について話す時に、他国にはない用語を使っていることも分かっています。例えば、「発問」、「板書」、「ねりあげ」は的確な英訳が存在せず、独特な意味を持った用語であると言えます。これらも、日本の教師が持つ授業の意味づけや価値観に根ざしています。授業という場を、個々の子供の見方や考え方が発露する場、それらを引出し、揺さぶり、よりよい解決を目指して協働で比較・検討する場、そして、子供の価値観までも変革させていく場として捉える教師の思いが詰まっていると考えられます。

その一方で、こうした日本らしさを若い世代がどう考えるかは興味のあるところです。授業の日本らしさも、時代のニーズにより合ったものに姿を変えていくかもしれません。

《シリーズ:教職大学院授業紹介②》「現代教師論」(共通科目[前期])

本講義では、現代の教師に求められる資質や能力を多角的に分析し、検討していくことを目的としています。それらを通じて、現職院生は、これまでの自らの道程を振り返り、ミドルリーダーとして今後のキャリア形成に見通しをもつことを目指します。学卒院生は、これからどのような教師になっていきたいのかについて考えることを目標とします。

3人の教員(小野瀬善行・司城紀代美・瓦井千尋)が担当し、それぞれ担当ごとに主テーマを決めて実施しています。今年度は、まず、教員養成の歴史や教員の役割期待などの変遷を跡づけ、「知識基盤社会」に求められる教員像はどのようなものかを検討しました。また、教師の多忙化について、具体的な働き方や判例を分析しました(小野瀬担当分)。次に、具体的な教師の学びに焦点を当て、授業研究を取り上げた文献を基に、教師が日々の実践や授業研究の中から実践的知識を構築していく過程についてまとめ、グループで発表しました。各グループから出された論点などを踏



【※写真は二枚とも実際の模擬面談の様子】

まえて、全教員・全受講生を交えて、意見交流を深めました(司城担当分)。最後に、教員評価の観点から教師の力量形成の実態と課題について検討しました。まず海外における教員評価制度の概要を確認したうえで、実際に評価シートなどの作成や模擬面談を通じて、これから教師としてどのような自己アピールが必要か、お互いのよさを認めるにはどのようなことに留意したらよいのかを実践的に考察しました(瓦井担当分)。

このように教師を取りまく状況を、制度や政策の観点、心理学的観点、実際の学校運営面から検討することに、この講義の意味と意義があると考えます。受講した院生からは、以下のような感想が挙げられています。「現場で働いている時には、指導の方法ばかりに目がいってしまい、学校教育の歴史や流れについてはほとんど注目していませんでした。現在の指導法や問題点などがなぜ起きているのか、考えるきっかけになりました。」(現職院生)。

(担当代表:小野瀬善行)



《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻 (教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。